台大日本語文研究第 44 期
2022 年 12 月，頁 91-118
2022-07-08 收稿，2022-11-28 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP. 202212_(44).0005

鎌倉～南北朝時期之彥部氏的動向，及其對同氏武家名門之敬意

龜田俊和*

摘要

本稿欲實證性地解明室町幕府初代執事高師直一族之庶流彥部氏在鎌倉～南北朝期間的動向，兼論連帶考察彥部氏對於同宗武家名門的清和源氏之敬意。亦即，旨在解明其相關史實與史觀，此兩者的關係。

分析的結果，首先解明了彥部氏姓氏由來之地，並非通說之陸奧國斯波郡內而是在同國的菊多郡內一事。第二是論證了在南北朝時期，不存在於彥部家各族譜之多位彥部氏的活躍，且他們在觀應之亂（1350-52）時所屬於足利尊氏、高師直派系因而沒落一事。第三，關於在貞治年間（1362-68）於鎌倉府（室町幕府之東國統治機關）奉公的彥部師朝及彥部直貞、重有兄弟也獲得諸多了解。

此外，放棄了近代的彥部家當初支持菊多郡一說，考察轉而支持斯波郡之理由以及背景。其最大的理由可以認為是因為，當地在文治 5 年（1189）奧州合戰之際，鎌倉幕府初代將軍源賴朝將本營設於此地斯波郡陣岡一事。而採用斯波郡說一事，也可以說是彥部家對於武家名門清和源氏之敬意的表徵，以此作結。

關鍵詞：鎌倉～南北朝時期的彥部氏、姓氏由來之地、觀應之亂、對武家名門之敬意、史實與史觀

* 臺灣大學日本語文學系助理教授

臺灣大學學術期刊資料庫

The Hikobe Clan's Movements during the Kamakura - Nanbokucho Period and the Respect for the Samurai Families of the Hikobe Clan

KAMEDA Toshitaka*

Abstract

This paper empirically elucidates the movements of the *Hikobe* clan, a lineage of the first butler of the Muromachi Shogunate, *Ko-no-Moronao*, during the Kamakura to Nanbokucho periods, and examines the respect of the *Hikobe* clan for the *Seiwa-Genji* clan as a warrior lineage. In other words, I aimed to elucidate the relationship between historical facts and historical perspective in the *Hikobe* clan.

I also examined the reasons and background behind the modern *Hikobe* family's abandonment of the theory of their origin derived from *Kikuta* Country, which they had initially supported, in favor of another theory of their origin derived from *Siba* Country. The most important reason is that *Minamoto-no-Yoritomo*, the first shogun of the Kamakura Shogunate, established his headquarters in *Jinoka*, *Shiba* County, during the Expedition to *Oshu* in 1189.

Key words: *Hikobe* clan in the Kamakura-Nanbokucho period, Place of surname, *Kanno* Disturbance, respect for a warrior family name, historical fact and historical perspective

* Assistant Professor of Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

臺灣大學學術期刊資料庫

鎌倉～南北朝期の彦部氏の動向と、同氏の武家名門への敬意

亀田俊和*

要旨

本稿は、室町幕府初代執事高師直一族の庶流彦部氏の鎌倉～南北朝期の動向を実証的に解明し、併せて彦部氏の武家名門としての清和源氏に対する敬意を考察したものである。いわば、史実と史観双方の関係の解明を目指した。

分析の結果、第一に彦部氏の名字の地が通説の陸奥国斯波郡内ではなく同国菊多郡内に存在したことを解明した。第二に、南北朝期には現存の彦部家諸系図には存在しない彦部氏が多数活躍したが、彼らは観応の擾乱（1350～52）で足利尊氏・高師直派に所属したことによって没落したことを論証した。第三に、貞治年間（1362～68）に鎌倉府（室町幕府の東国統治機関）に奉公していた彦部師朝や彦部直貞・重有兄弟についても知見を得た。

そして近代の彦部家が当初支持していた菊多郡説を放棄し、斯波郡説に転じた理由や背景を考察した。その最大の理由は、同地が文治5年（1189）の奥州合戦に際し、鎌倉幕府初代将軍源頼朝が斯波郡陣岡に本陣を設置したことにあると考える。斯波郡説の採用は、いわば清和源氏という武家の名門に対する敬意の表れだったと結論づけた。

キーワード：鎌倉～南北朝期の彦部氏、名字の地、観応の擾乱、武家名門への敬意、史実と史観

* 台湾大学日本語学科助理教授

臺灣大學學術期刊資料庫

鎌倉～南北朝期の彦部氏の動向と、同氏の武家名門への敬意

亀田俊和

一、はじめに

本稿は、室町幕府初代執事高師直一族の庶流彦部氏の鎌倉～南北朝期の動向を実証的に解明し、併せて彦部氏の武家名門としての清和源氏に対する敬意を考察するものである。本分析を通じて、彦部氏の史実と史観双方の関係の解明を目指している。

彦部氏の本姓は高階朝臣であり、古代の天武天皇の末裔とされる。鎌倉時代に登場した光朝が、彦部氏の初代とされる。室町時代には、幕府や鎌倉府の奉公衆（室町将軍・鎌倉公方直属の武士）として高一族嫡流をしのぐ活躍を見せた。

江戸時代には現群馬県桐生市広沢町に土着し、農業・織物業を営む名主となった。明治以降も桐生地方の織物業や政界に多大な貢献を果たし、現在も子孫が健在である。広沢に現存する彦部家住宅は、日本国の国指定重要文化財で、中世の城館跡に近世の農民住宅や近代の織物工場が合体したユニークな史跡である。

中世の彦部氏に関する主な研究史は、以下のとおりである。まず1979年と89年に、新行紀一が15世紀の三河国の奉公衆を論じるにあたって彦部氏に言及した[1]。

次いで1995年に、彦部家自らが同氏の通史を刊行した。古代・中世は奥富敬之が執筆している[2]。その他、管見では松島周一が三河国山中郷との関わりで彦部氏について部分的に言及し、木下聡も戦国期の彦部氏を中心に論じている[3]。

---

1 新行「十五世紀三河の守護と国人」（『年報中世史研究』4、1979年）および同「守護と奉公衆」（『新編　岡崎市史　中世』、1989年）326～331頁。以下、本稿ではそれぞれ新行A・新行Bと称し、著書・論文等の副題を省略する

2 奥富「彦部家の歴史（古代・中世）」（彦部家編『彦部家の歴史　改訂版』（群馬出版センター、2013年、初版1995年）。

3 松島「三河国山中郷と室町幕府」（『愛知県史研究』22、2018年）、木下「戦

一方、筆者は室町幕府の将軍補佐役である執事（管領）の権限を中心に研究してきた[4]。特に、幕府初代執事高師直を優れた改革派政治家として高く評価している[5]。師直を検討する過程で高一族庶流の彦部氏の存在を知り、同氏の研究を開始した。

まず 2017 年に発表したのは、室町～戦国期の彦部氏に関する論考である[6]。その主要な成果は、近代に彦部家が編纂した諸家譜には記載されない、応永 20 年（1413）に山城守護高師英の下で守護代を務めた彦部山城入道の存在を指摘したことなどである。

次いで、2018 年に近代彦部家の家史編纂事業の過程を検討した[7]。その最も重要な成果は、異なる複数の所伝が存在した場合、京都の足利将軍家に対する忠誠や緊密な関係を強調するものを優先して選択する傾向があることを指摘したことである。またこの論文では、近代は足利尊氏を逆賊として非難する歴史観が強化されていった時代であるが、彦部家ではその趨勢に逆行して将軍家との関係を顕彰する歴史観が形成されたことにも注目した。

この研究の過程で、南北朝期の彦部氏に関してもいくつかの知見を明らかにした。だが、鎌倉期～南北朝期の彦部氏についてはまだ検討すべき余地が残っていると考える。また以前の筆者の見解を変更した箇所もある。そこで本稿は当該期の彦部氏に関して、彦部家の家史以外の史料とも照合して、次の論点を解明したい。

① 鎌倉～南北朝期の彦部氏に関して、いくつかの知見を実証的に明らかにする（史実の解明）。

② 足利将軍家にとどまらず、代々の彦部氏に継承されてきた名門としての清和源氏に対する敬意を考察する（史観の考察）。

具体的には、二で「彦部」という名字の由来となった地を解明す

国期室町幕府と彦部晴直」（彦部家住宅紅葉狩りウィーク基調講演レジュメ、2018 年）。

4 拙著『室町幕府管領施行システムの研究』（思文閣出版、2013 年）。

5 拙著『高師直』（吉川弘文館、2015 年）など。

6 拙稿「室町～戦国期の彦部氏」（『十六世紀史論叢』8、2017 年）

7 拙稿「近代彦部家の家史編纂事業」（拙著『南北朝期室町幕府をめぐる諸問題』国立台湾大学出版センター、2022 年、初出 2018 年）。以下、本稿では註 6 所掲拙稿と本註所掲拙稿をそれぞれ拙稿 A・拙稿 B と称する。

る。三で、南北朝期の彦部氏に関して、近代彦部家が編纂した諸系図と『清源寺本高階系図』(高一族庶流の南宗継が開基となった南氏の菩提寺で、栃木県足利市名草中町に現存する清源寺がかつて所蔵していた系図で、比較的信頼性が高いと評価されている[8])との記述が大幅に異なっている理由や背景を検討し、当該期の彦部氏の動向を解明する。四で観応の擾乱(1350～52)の彦部氏について先行研究を再検討し、五で②の問題を①と関連づけながら考察したい。

つまり二・三・四は彦部氏の史実の解明で、五は同氏が現代に至るまで抱いてきた史観および史実・史観両者の相互作用についての考察である。

二、鎌倉時代の彦部氏—名字の地の検討—

本章は、「彦部」という名字の由来となった地を論証したい。この問題は単なる史実の実証にとどまらず、同家の歴史観を探る上でも非常に重要であると考える。

その前提として、以前筆者が検討した近代彦部家の家史編纂過程に関する知見が[9]、本稿の理解に必須である。そこでまず、その結論を表として掲載する。以下、この表に基づいて論証を進める。なお、彦部家には古文書も伝来する[10]。

彦部氏の名字の地は、陸奥国斯波郡彦部郷すなわち現在の岩手県紫波郡紫波町彦部に比定する説と、陸奥国菊多郡すなわち現在の福島県いわき市内に比定する説がある。両者はともに陸奥国内に属するものの、同国北部に位置する斯波郡と最南端にある菊多郡は 300 キロメートル以上も離れている。移動には現代でも高速道路で 4 時間近くかかり、まったく別の地方である。

---

8 峰岸純夫『足利尊氏と直義』(吉川弘文館、2009 年) 179～190 頁に全文が翻刻されている。また、南宗継については拙著『高一族と南北朝内乱』(戎光祥出版、2016 年) 126～137 頁を参照されたい。

9 註 7 所掲拙稿 B。

10 彦部文書(東京大学史料編纂所所蔵影写本 3071・33—17 および同所所蔵写真帳 6171・33—18)。影写本と写真帳は、必ずしも一致しない。また、一部が『群馬県史　資料編 6　中世 2』『同　資料編 7　中世 3』に収録されている。

臺灣大學圖書館 日本研究資料庫

彦部氏関連史料対応表

	史料編纂所所蔵	番号	群馬県立文書館所蔵	番号	内容	名字の地
A			『高階朝臣家譜』	H2－8中 世75／26	明治末～大正頃に編纂された彦部家系図の集大成 現代彦部家の家宝	菊多郡
B	『彦部家譜』	謄写本2075-715	『天賓』	同76／27	Aの基となった系図 幕末に編纂開始 『群書類従』『系図纂要』参照ヵ	菊多郡
C	『彦部系譜』	謄写本2075-745	『高階姓彦部家系譜』	同76／33	幕末に、Aとは別個に編纂開始された系図 鎌倉府奉公衆の系統に関する記述が、Aよりも充実している 『尊卑分脈』参照ヵ	奥州彦部
D	『高階姓彦部氏系図』	写本4075-20	『高階朝臣彦部氏系図』	同77／42	編纂所所蔵は最も早期に編纂された草稿ヵ	斯波郡 →菊多郡
E	『彦部由緒書』	謄写本2075-716	『由緒書　扣〈宝暦十三年癸未八月御屋敷江差出候節〉』	同75／23	宝暦13年（1763）8月、桐生彦部家七代昌信が領主鳥居権介へ提出した、彦部家の歴史に関する上申書	菊多郡
F	『彦部先祖書』	謄写本2075-746			Eと同様、昌信の上申書 戦国期以降に限定	
G			『由緒書』	同77／36	近代に作成ヵ	菊多郡
H			『由緒書　秘録』	同75／22	E・Gを合体ヵ	菊多郡
I			『家譜　筆写』	同76／31	由緒書や古文書の断簡	

※明治18年（1885）の修史館（東京大学史料編纂所の前身）による調査以降も、彦部家では家史編纂事業が継続され、B・C・Dに加筆・修正が施された。現在、群馬県立文書館にそれらの写真版が収蔵されている。

現代の彦部家も含め、前者すなわち斯波郡説が多数派であると見受けられる[11]。その根拠として挙げられるのは、以下の 3 点である。

①建武年間（1334～38）に、彦部秀光が斯波家長に従い、同地に下向したとする所伝がある。

②同地にある機織館とよばれる城館跡が、彦部氏のものであったとする所伝がある。

③同地にある正養寺に、彦部氏のものと伝えられる墓が現存する。

しかし、筆者はこの説には問題があると考えている。まず①であるが、建武 2 年（1335）末に足利尊氏勢力の東国支配の代官として斯波家長が奥州斯波郡に下向したこと自体は史実と見なせる[12]。だが、その際彦部秀光が家長に従ったとする所伝に確実な史料的根拠は存在しない。後述するように、秀光は 1360～70 年代に京都で将軍足利義詮・義満の近臣として活動した人物である。その人物が約 30～40 年前の 1330 年代初頭に奥州に下向していたとするのはかなり不自然である。

また仮にこの所伝が正しかったとしても、これは建武期の伝承である。つまり、そもそも鎌倉時代に活動した光朝が彦部氏の初代であるとする諸系図の記述と矛盾する。

②③も、正確な年代は不明である。また、機織館を彦部氏ではなく河村氏の館であるとする見解も存在する[13]。

加えて看過できないのは、彦部家自身においても当初は菊多郡説が圧倒的に優勢だったことである。

---

11 斯波郡説は、豊田武「元弘討幕の諸勢力について」（同『豊田武著作集　第七巻』吉川弘文館、1983 年、初出 1967 年）27 頁、入間田宣夫「奥州における北条氏所領の内部構造」（同『北日本中世社会史論』吉川弘文館、2005 年、初出 1970 年）201 頁、『岩手県の地名』（平凡社、1990 年）411 頁、註 2 所掲奥富通史 147 頁、八重嶋勲編「岩手の郷土史料に見る彦部氏」（彦部の歴史を深める会編『彦部の歴史』彦部の歴史を深める会、2011 年）と多数見える。対して菊多郡説は、註 1 所掲新行 A 29 頁、紫波町教育委員会編『ふるさと物語』（紫波町、1983 年）61～62 頁くらいしか管見に入らない。『ふるさと物語』は、1962 年から 81 年にかけて佐藤正雄が『広報しわ』に掲載した同名の連載を編集したものである。

12 小川信「長子斯波家長の活動」（同『足利一門守護発展史の研究』吉川弘文館、1980 年、初出 1971 年）378～380 頁。

13 沼舘愛三編『南部諸城の研究』（伊吉書院、1981 年）289 頁。

臺灣大學 期刊資料庫

彦部家の諸系図において、同氏の名字の地を陸奥国斯波郡としているのは、わずかに『高階姓彦部氏系図』（表 D。以下同様）のみである。これを継承したと思われる『高階朝臣彦部氏系図』（表 D）では、同氏の出身は陸奥国菊多郡に変更されている。

さらに、『彦部家譜』およびそれに加筆・修正を施した『天賓』（いずれも表 B）、そして同家の家宝として最重要視される『高階朝臣家譜』（表 A）に至るまで、大半の諸系図が光朝は「菊多郡彦部郷」に移住し、彦部六郎を称したと明記している。また江戸時代に作成された『彦部由緒書』（表 E）なども、陸奥国菊多郡説を採用している。つまり彦部家自身が本来、自己のルーツを菊多郡であると認識していたのである。

そのため、新行紀一は彦部氏発祥の地を菊多郡と断定している。また、佐藤正雄も斯波氏家臣の彦部氏は現代の桐生彦部氏とは別系統であったと結論づけている[14]。だが佐藤説に対しては八重嶋勲が、現在のいわき市内に彦部の地名が存在しないことを根拠に批判を加えている[15]。

しかし、それでも筆者は彦部氏の名字の地は菊多郡内にあった可能性がきわめて高いと考える。なぜなら彦部氏の諸系図は、名字の地を菊多郡彦部郷と明記するだけではなく、同氏および同氏の先祖である高一族と福島県、特にいわき市との関係を強く示唆する記述が非常に多いからである。また彦部家以外が所蔵する一次史料からも、高一族と福島県の強い関係が窺える古文書が存在する。

康和 4 年（1102）、高惟頼が陸奥国菊多郡検断職に任命されて奥州に下向し、大高寺を建立したとの記述がある。大高寺はいわき市勿来町大高に現存するが、無論菊多郡内である。

惟頼の曽孫高惟長は陸奥国信夫郡大領壬生忠澄の娘を母とし、外祖父忠澄から信夫郡を譲り受けたとされる。『高階姓彦部氏系図』（表 D）では足利義兼の推薦によって源頼朝から忍郡（信夫郡）を

[14] 以上、註 1 所掲新行 A29 頁、註 11 所掲『ふるさと物語』61～62 頁。
[15] 註 11 所掲八重嶋論文 237 頁など。

臺灣大學藝術期刊資料庫

恩賞として拝領したとされ、同様の所伝が記載される彦部家以外の系図も多い。領有の契機はともかくとして、惟長と信夫郡の関係にはある程度の信憑性が窺える。ちなみに、信夫郡は現在の福島市である。

惟長には惟信・惟俊・惟綱・惟業という 4 人の弟がおり、それぞれ芦屋五郎・泉六郎・芦屋七郎・田中左衛門尉と名乗ったとされる。芦屋は陸奥国菊多郡芦屋郷、泉は同国磐前郡泉郷、田中は同国磐城郡田中郷と注記され、これらはすべて福島県内の郡である[16]。

彦部光朝の父とされる惟貞（『高階姓彦部氏系図』（表 D）などでは光貞）は窪田三郎を称したというが、この窪田も菊多郡内の地名である（現いわき市勿来町窪田）。光朝も、当初は窪田六郎と名乗っていた。また、光朝の母は田村荘司信顕の娘とされる。田村荘は、現在の福島県田村郡と郡山市の一部に比定される。

建長 6 年（1254）正月 10 日、光朝は前述の菊多郡大高寺に阿弥陀如来像および脇侍菩薩像二体を寄進した。そのときの寄進状が書写されており、末尾に「此像、今岩城平熊野山隆久寺現存云」との注記がある。岩城平は現在のいわき市平で、いわき市の中心部である。

ところで、彦部郷に関しては次の史料が古くから知られている。

〔史料 1〕

陸奥国彦部郷田数之事

一　六村本弐百丁也

東彦部百六丁六段大

西彦部九十三丁三段小

此内わけの事

廿七町七段半　　東彦部山入

四十二町四段半　大松

廿三町一段小　　小松

[16] ただし、鎌倉時代の菊多郡・磐前郡にはそれぞれ芦屋・泉という地名は存在しない。また田中郷も、『系図纂要』では近江国内の地名とされている（註 2 所掲奥富通史 136～138 頁）。

臺灣大學學術資料庫

右ハ西分
七十五町　湊江分
十八町五段　大高名
七町五段　松原崎
五町六段　小重名
右ハ東分
仁治弐年〈辛丑〉九月十日
磐城平大高氏(寺カ)蔵

仁治2年（1241）9月10日付陸奥国彦部郷田数目録写である。本史料は彦部郷の田数を記載した目録写で、『鎌倉遺文』にも収録されている[17]。この史料も斯波郡説の根拠として挙げられることがある。

だが本文書は、「陸奥国彦部郷」とあるのみで郡名は明記されていない。つまり、〔史料1〕は斯波郡説の根拠にはなり得ない。また現在の岩手県紫波郡紫波町に、これらの地名が彦部を除いて存在しないことも軽視できない。

一方、本目録に記載される地名のうち、大高がいわき市内に現存する。松原崎についても、これと同系統の地名と考えられる松原が同市内に散見し、このうち同市泉町滝尻松原・同市仁井田町松原が菊多郡内に属する[18]。

何より、文書の末尾に「磐城平大高氏(寺カ)蔵」と注記されているのは看過できない。この注記は、彦部郷が菊多郡内にあった強力な根拠となるのではないだろうか。

以上に列挙した所伝自体も、その真偽は検討を要する問題である[19]。しかし、少なくとも彦部氏が現在の福島県と深い関係を持っていたことまでは否定できないであろう。

加えて、次に掲げる2点の一次史料も、菊多郡説の有力な傍証に

[17] 5926号。
[18] 江戸時代には、「松原新田」と名づけられた新田も存在した（『福島県の地名』（平凡社、1993年）117頁）。
[19] たとえば、註16で指摘した問題がある。

臺灣人文學術期刊資料庫

なると考えている。

〔史料 2〕

自最初参御方、致忠節之条、尤所感思也、師直（高）・師泰等、已被誅伐之後、将軍家（尊氏）無為御入洛、天下大慶此事也、有与党之輩者、加退治、弥可致忠節之状如件、

観応二年三月四日　　（花押（足利直義））

結城七郎兵衛尉（朝常）殿[20]

〔史料 2〕は、観応 2 年（1351）3 月 4 日付足利直義感状である。

観応元年（1350）、観応の擾乱が勃発した。観応の擾乱とは、室町幕府初代将軍足利尊氏・執事高師直と足利直義（尊氏弟）が戦った、幕府の内訌である[21]。

擾乱の序盤は直義軍が優勢で、観応 2 年 2 月 26 日に師直が一族・被官とともに摂津国武庫川辺で殺害され、直義と尊氏の講和が一時成立した。

この直義感状は、講和成立直後に結城朝常に宛てて発給された感状である。直義に忠節を尽くしたことに感謝すると同時に、高師直・師泰兄弟の残党が残っていた場合、その退治を命じている。結城朝常は現在の福島県白河市を拠点とした武士で、小峰氏の祖である[22]。

〔史料 3〕

為岩切城（陸奥国）之後攻、師直（高）・師泰余類等、可襲来当国之由、依有其聞、於白川関（陸奥国）、就被致警固、無為対治之間、准戦功、可被抽賞之状如件、

[20] 正文、榊原結城文書（『南北朝遺文　東北編』1054 号）。

[21] 拙著『観応の擾乱』（中央公論新社、2017 年）。以下、本稿の観応の擾乱に関する記述も大半は拙著に拠っている。

[22] 山田邦明「白河結城氏と小峰氏」（村井章介編『中世東国武家文書の成立と伝来に関する史料学的研究』平成 16 年度～平成 18 年度科学研究費補助金基盤研究（B）16320085 研究成果報告書、2007 年）132 頁。

臺灣大學日本語文學系 版權資料庫

観応弐年三月六日　　右京大夫（吉良貞家）（花押）

結城七郎兵衛尉（朝常）殿[23]

〔史料 3〕は、当時直義派に属していた奥州探題吉良貞家が朝常に出した感状である。これによれば、高一族の与党が陸奥国岩切城（現仙台市宮城野区）を支援するために襲来するという風聞があったので、朝常が同国白河関（現在の福島県白河市にあった関所）を警備したという。

〔史料 2〕〔史料 3〕から、少なくとも観応の擾乱期に至るまで、北関東から南奥州にかけて高一族の勢力が根強く存在していたらしいことが窺えるのではないだろうか。それは、彦部家の諸系図の記述とよく符合するのである。

以上検討したように、彦部氏発祥の地が菊多郡内に存在したことを裏づける傍証は非常に多い。ただしこの説には、

①いわき市内に、肝心の「彦部」の地名が現存していない。

②『高階姓彦部氏系図』（表 D）の光朝の項目に、「陸奥国斯波郡彦部村ニ住」とある。

という弱点がある。しかし①に関してはすでに佐藤正雄が推定したように、地名が消滅して現代に伝わらなかったと考えてよいのではないか。

②については、誤記と考えられる。『彦部系譜』およびそれを加筆・修正した『高階姓彦部家系譜』（いずれも表 C）には、惟長の項目に「野州足利庄、依義兼申違没収(ママ)、右大将頼朝有執奏有衆議、賜奥州斯波郡内領知」とある。これは、江戸時代の彦部家が『尊卑分脈』から信夫郡拝領の伝承を書写する際に斯波郡と誤記したものと考えられる。同様の過誤が起こったとする想定は許されるだろう。

だが②の誤記は、後続の『彦部家譜』（表 B）ですぐに修正された。これはおそらく、『彦部由緒書』（表 E）の記述を踏まえてな

[23] 正文、白河集古苑所蔵白河結城文書（『南北朝遺文　東北編』1055 号）。

臺灣大學學術期刊資料庫

されたと思われる。そして前述したように、少なくとも明治末～大正初期に『高階朝臣家譜』（表 A）が作成される頃までは、彦部家では菊多郡説が通説だったのである。

ところが昭和 18 年（1943）8 月頃、当時の彦部家当主保蔵と岩手県紫波郡彦部村村長佐藤定八との間で文通が行われた[24]。その際、保蔵は定八より斯波郡説の根拠である②③すなわち機織館と正養寺の伝承を教わり、それまでの菊多郡説を放棄して斯波郡説に転じたらしい。

この“転向”は、彦部家の歴史観を探る上できわめて重要であると考える。この理由や背景については、五で考察したい。

以上の検討により、彦部氏の名字の地は陸奥国菊多郡であると結論づけたい。ただし彦部氏の一部が斯波氏の家臣として斯波郡で活動していた伝承は、ある程度史実を反映していると考えている。

三、南北朝時代の彦部氏―観応の擾乱以前―

（一）彦部和泉守・彦部五郎・彦部七郎・彦部次郎

南北朝期の彦部氏系図については、以前も検討したように彦部家が所蔵する諸系図相互でさえ異同が大きい[25]。

その上、『清源寺本高階系図』はさらに大幅に異なっている。本稿冒頭で紹介したが、『清源寺本高階系図』は高一族庶流の南宗継が開基となった南氏の菩提寺で、栃木県足利市名草中町に現存する清源寺がかつて所蔵していた系図で、比較的信頼性が高いと評価されている。彦部氏だけではなく、高一族嫡流や南氏・大高氏といった庶流も記載している。

本節では、彦部家の系図と『清源寺本高階系図』が大きく異なる理由を考察する。そしてそこから、従来は知られていなかった南北朝期の彦部氏の動向を解明したい。

まずは彦部家の諸系図から最も標準的と考えられる『彦部家譜』

[24] 註 11 所掲八重嶋論文 227～228、239～240 頁。
[25] 註 7 所掲拙稿 B 193～195 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

（表 B）の略系図を選び[26]、『清源寺本高階系図』の略系図と並べてみよう。

【彦部家譜】（表 B）

光朝┬光継―秀貞（光貞イ）┬光春
　　└行貞　　　　　　└秀光

【清源寺本高階系図】

光朝┬光継┬朝継
　　├光貞├師光
　　└七郎├惟継
　　　　└助貞

両系図は、かろうじて光朝・光継父子が一致するだけである。特に、彦部家家史では嫡流とされる光春の名が『清源寺本高階系図』に見られない点は看過できない。

なぜ両系図は、ここまで異なっているのであろうか。この問題を考えるために、まずは系図以外の史料に登場する南北朝期の彦部氏について検討したい。

【彦部和泉守・彦部五郎】

康永元年（1342）12 月 5 日、造営中の天龍寺で綱引・禄引式が開催された。そのとき、彦部和泉守が将軍足利尊氏の御沓役を務め、彦部五郎も参加した[27]。

和泉守という受領官途を名乗っていることと、将軍の御沓役という重要な役割を担っていることから、この彦部和泉守は当時の彦部氏当主であったと推定できる。しかし彦部氏関連の諸系図には、和泉守あるいは五郎を名乗る人物は載っていない。

【彦部七郎】

貞和 4 年（1348）11 月 6 日、河内国下仁和寺荘の名主・百姓が北

[26] 『彦部家譜』（表 B）を選択した理由は、第一に彦部秀光を光春の弟とする点で、父とする他の系図よりも年代的に符合すること、第二に『高階朝臣家譜』（表 A）等で創作と見なせる光高が存在しないことである（註 7 所掲拙稿 B195～197 頁）。

[27] 以上、『天龍寺造営記』同日条（鹿王院文書研究会編『鹿王院文書の研究』思文閣出版、2000 年）。

臺灣大學學術期刊資料庫

朝へ申状を提出し、同年同月 1 日に彦部七郎が妙心寺領同荘地頭職を侵略したことを訴えた。この提訴を承けて、同年同月 10 日と翌 5 年 4 月 17 日の二度にわたって室町幕府へ調査を命じる光厳上皇院宣が出された。同年 5 月 9 日には、幕府禅律頭人藤原有範が院宣を執行し、彦部七郎の濫妨を停止して下地を妙心寺雑掌に沙汰付することを河内守護高師泰へ命じる奉書を発給した。この命令を承けて、師泰は同年同月 25 日に岩堀中左衛門尉（守護代ヵ）へ奉書の執行を命じる遵行状を発給した[28]。

これに先立つ貞和 4 年正月 5 日、河内国四条畷の戦いがあり、幕府執事高師直軍が南朝楠木正行軍を撃破した。師直が帰京した後も、師泰は河内・和泉守護として河内に駐屯し、南朝残党の掃討戦を展開していた。こうした当時の情勢を踏まえれば、彦部七郎は師泰の被官として河内に在陣し、軍事費捻出のために荘園を侵略したのではないだろうか。

その後、観応 2 年（1351）2 月 26 日に高師直一族が摂津国武庫川辺で斬殺された際、彦部七郎も小林掃部助に殺害されたことが『太平記』に記されている[29]。この彦部七郎は、下仁和寺荘を侵略した彦部七郎と同一人物と見てよいであろう。『園太暦』にはこのときの犠牲者として「彦目」が登場するが[30]、これは彦部の誤記で、七郎を指すと考えられる。

では、彦部家の史料では彦部七郎はどのように扱われているだろうか。この問題についても以前検討した[31]。結論を要約すれば、近世～近代の彦部家では、七郎は当初光春の父で、建武 3 年（1336）5 月の摂津国湊川の戦いで戦死した人物とされていた。しかし山城妙心寺文書や『太平記』の記述も総合すると、湊川で名誉の戦死を遂げ

28 以上、すべて案文、山城妙心寺文書（『大日本史料』貞和 4 年 11 月 10 日・貞和 5 年 4 月 17 日条）。
29 巻第二九「師直以下討たるる事」。『太平記』のテキストは、西源院本を底本とした『太平記』（兵藤裕己校注、岩波書店、全 6 冊、2014～16 年）に依拠した。
30 同記観応 2 年 2 月 27 日条。
31 註 7 所掲拙稿 B196～198 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

たはずの七郎がその後も生存している矛盾が生じる。しかも荘園を侵略して提訴され、さらに通説では悪人とされる師直とともに斬殺される最期を遂げている。それを不名誉に感じた彦部家は、最終的に家譜から七郎を削除した模様である。

ところが『清源寺本高階系図』では、彦部七郎は光継の弟として登場する。この七郎が荘園を侵略して師直と生死を共にした七郎であった可能性は高いと思われる。

【彦部次郎】

観応の擾乱期の関東地方では、足利尊氏・高師直派の関東執事高師冬と、足利直義派の関東執事上杉憲顕が激しく戦った。観応元年（1350）12 月 26 日、直義派の石塔義房らが、相模国毛利荘湯山に在陣していた師冬軍を襲撃し、鎌倉公方足利基氏（尊氏の実子）の身柄を奪い、基氏の護衛を務めていた三戸七郎（高師親。師冬の甥兼養子）と彦部次郎を殺害した[32]。

ここから観応の擾乱において、彦部次郎が師冬に従って関東で活動していたことが知られる。次郎も彦部氏関連の諸系図では確認できない人物である。しかし『清源寺本高階系図』には、光継の子朝継に「次郎」の注記があり、「嫡子」とも記されている。

繰り返すように、和泉守・五郎・次郎は彦部家の諸記録には見えない。七郎は、系図の編纂過程で一瞬登場したものの抹消された。

一方、『清源寺本高階系図』では、少なくとも七郎と次郎（朝継）の存在は確認できる。和泉守と五郎についてはこちらの系図にも存在しない[33]。

以上の事実は、実際の彦部氏の系譜が現存する系図よりもはるかに多様であったことを示唆している。この問題を追求するために、次節では彦部家の諸系図では彦部氏当主であったとされる光春の行

[32] 観応 2 年（1351）正月 6 日付石塔義房注進状案写、山城醍醐寺報恩院所蔵古文書録乾（『南北朝遺文　関東編』1952 号）。

[33] 前述したように和泉守は官途から当時の彦部氏当主であったと推定できるので、嫡子とされる次郎朝継の父光継であった可能性はあるだろう。ただし、彦部氏の系図では光継は正和 5 年（1316）に死去したとされ、年代が合わない問題がある。

臺灣大學學術機構典藏

動を検討したい。

（二）彦部光春

彦部家には、彦部光春に関連する古文書が 2 通残されている。

〔史料 4〕

筥根路警固事、所□(遣)荒河参河三郎(頼清)入道也、早属彼手、可致忠節之状如件、

観応二年十二月十八日　　（花押(足利直義)）

彦部四郎(光春)殿[34]

〔史料 4〕は、観応 2 年（1351）12 月 18 日付足利直義軍勢催促状である。荒河頼清の部隊に所属して箱根路を警固することを彦部光春に命じる内容である。

観応の擾乱第一幕で圧勝した直義であるが、兄尊氏との講和は 5 ヶ月で破綻し、観応 2 年 7 月末には京都を脱出して北陸へ逃亡した。こうして、観応の擾乱第二幕が始まった。直義は同年 11 月 15 日に鎌倉へ転進し、尊氏の遠征軍を迎え撃つこととなった。同月 29 日には尊氏軍は駿河国薩埵山まで進出し、これを直義軍が包囲する形勢となった。

本文書は、こうした状況下で発給された。彦部光春が、観応の擾乱において直義派であったことは明白である。しかし翌観応 3 年（1352）には、光春が尊氏に従っていたことを示す史料がある。

〔史料 5〕

去月七日・八日於竹下合戦之砌、石堂小次郎頼次・同新九郎頼長・彦部四郎光春、先陣ニ進之、敵七人討之候畢、早賜御証判備後鑑、以可伝子孫、依言上如件、

観応三年正月五日　　荒河三河三郎(頼清)入道

進上　御奉行所

承候了(異筆)　（花押(尊氏)）[35]

[34] 註 10 所掲東京大学史料編纂所所蔵写真帳。
[35] 註 10 所掲東京大学史料編纂所所蔵写真帳。

臺灣大學圖書館期刊資料庫

観応3年（1352）正月5日付荒川頼清軍忠状である。前年観応2年12月7日と8日の相模国竹ノ下合戦で、彦部光春が石塔頼次・同頼長らと先陣を務めて敵7人を討ち取った軍功を荒河頼清が上申し、将軍尊氏の証判を得た文書である。これを素直に受け取れば、観応3年正月の段階で光春は尊氏派に転じていたことになる。しかしこの文書は、様式や内容に問題がある。

まず、観応年号を使用していることが問題である。観応2年11月、尊氏は南朝に降伏した。所謂「正平の一統」であるが、これ以降尊氏は自身の発給文書に南朝の正平年号を使用している。それに伴い、尊氏軍の将兵も当然正平年号を使用している。具体例を挙げれば、正平7年（1352）正月日付高麗経澄軍忠状がその一例である[36]。

また、日下に軍忠状作成者の氏名を記載する方式も不自然である。文中に軍忠の証人が記されないのも異例で、「可伝子孫」もあまり見ない文言である。

内容面では、〔史料2〕を踏まえれば観応2年12月7日と8日の段階では彦部光春は直義軍に属しているはずであり、尊氏軍の陣営にいるのも矛盾している。

そして何よりの問題は、この両日に竹ノ下で尊氏・直義両軍が交戦した史実が存在しないことである。宇都宮氏綱および薬師寺公義ら下野・武蔵両国の尊氏派の援軍が下野国宇都宮を出発したのは12月15日で、相模国足柄山で直義軍を撃破したのは29日である[37]。

以上、〔史料5〕には問題があるが、観応3年正月段階で彦部光春が尊氏派に転じたことは確かであると考える。

まず一般論として、南北朝期の戦争において、戦況の悪化で武士が主君を見捨てて寝返った事例は枚挙にいとまがない。観応の擾乱第二幕も最終的に尊氏軍が勝利したため、一連の過程で細川顕氏・畠山国清・大高重成など直義派武将の多数が尊氏派に転じたことを確認できる。

[36] 正文、武蔵町田文書（『南北朝遺文　関東編』2169号）。
[37] 以上、『太平記』巻第三〇「那和軍の事」、註36所掲高麗経澄軍忠状。

臺灣大學圖書館期刊資料庫

こうした状況を踏まえれば、光春も当初直義に属して箱根路を警固していたが、戦況の悪化に伴って所属部隊長の荒河頼清らとともに尊氏軍に投降したこと自体は確かであると考えてよいであろう。

以上の諸情報を整合的に解釈すると、観応の擾乱以前においては、彦部和泉守や七郎・次郎たちの活動が活発で、光春は傍流的な存在だった。しかし擾乱で七郎らは尊氏・師直派に属して敗北し、大半が滅亡乃至衰退した。だが光春は直義派から尊氏派に転じることによって生き残り、彦部氏嫡流の地位を獲得した。

上の事情から、『尊卑分脈』などの諸系図には七郎や次郎は記載されなかったとおぼしい。したがって、それを参照した彦部家の諸系図にも彦部和泉守たちは存在しないのである。

これに対して、『清源寺本高階系図』は当初から尊氏派に属した高一族庶流南氏が作成した系図であったため、抹消された彦部氏たちをかなり記載することとなった。これが、『清源寺本高階系図』における彦部氏の系譜が他の諸系図と著しく異なる原因であると考えられるのである。

四、南北朝時代の彦部氏―観応の擾乱以降―

本章では、南北朝期における観応の擾乱以降の彦部氏について、検討すべき問題や以前の私見の訂正について論じる。

【彦部秀光】

貞治 6 年（1367）3 月 13 日、北朝後光厳天皇が長講堂へ行幸し、2 代将軍足利義詮が供奉した。これに彦部秀光が従ったことが『太平記』巻第四〇に見える[38]。秀光は光春の父か弟とされるが、父だとした場合、子の光春が文和 4 年（1355）に 38 歳で死去した 12 年後に第一線で活動しているのは不自然である。以前も検討したとおり、年代的には弟説が整合的である[39]。

なお応安 7 年（1374）正月 10 日と翌 8 年正月 13 日、彦部新左衛

38 「将軍御参内の事」。
39 註 7 所掲拙稿 B195～196 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

門尉が幕府評定において加用（給仕役）を務めた記事が残る[40]。『清源寺本高階系図』では彦部光貞の子貞朝および弟宗光、『太平記』巻第四〇では彦部秀光が「新左衛門尉」とされる。年代的には、秀光が妥当であろうか。

【彦部師朝】

貞治4年（1365）10月8日、鎌倉公方足利基氏の近習たちが山城六波羅密寺へ馬を奉納した。その奉加状に[41]、彦部師朝の名と花押が記されている。

『高階朝臣家譜』（表A）などには、彦部光継の弟行貞の孫に師朝の名が見え、官途が修理亮とされている[42]。

このことから先行研究は、文安年間（1444～49）頃作成の『文安年中御番帳』および宝徳・享徳年間（1449～55）頃作成の『永享以来御番帳』に見える彦部修理亮を師朝に比定し、筆者もそれに従ったことがある[43]。

しかし基氏の近習であった師朝が、約90年後の京都で奉公衆を務めているのはいかにも不自然である。そもそも奉加状には師朝は「散位」と記され、「修理亮」ではない。

師朝の子孫が京都に移住して幕府奉公衆となった可能性はあるだろうが、彦部家の諸系図に記される師朝と室町中期の奉公衆番帳に記載されている修理亮の間には、一～二世代の遺漏か錯乱があるのではないだろうか。

【彦部直貞・重有兄弟】

この兄弟については以前も検討したが註で補足するにとどまり[44]、現在は見解も変更したので改めて取り上げたい。

〔史料6〕

（前略）今朝関東使者彦部左衛門尉直貞進使者若党、是直貞任近

---

[40] 正文、それぞれ、『御評定着座次第』同日条（『群書類従　第二九輯』）。
[41] 山城六波羅蜜寺文書（『南北朝遺文　関東編』3290号）。
[42] なお、『清源寺本高階系図』には師朝は存在しない。
[43] 以上、註1所掲新行B330頁および註5所掲拙著187頁など。
[44] 註6所掲拙稿A33頁。

臺灣大學學術資料庫

江守事、并舎弟彦部又次郎重有任左京亮事宣旨付之、（中略）去月自関東上洛、近日可下向云々、（後略）

『師守記』貞治 6 年（1367）4 月 13 日条である。この日、北朝で小除目が行われ、彦部直貞（左衛門尉）が近江守、弟重有（又次郎）が左京亮に任命された。直貞は先月から鎌倉府の使者として上京し、まもなく関東に帰る予定だったという。北朝の外記中原師茂は、冷泉為秀を上卿として彦部兄弟をこれらの官職に任命する外記局の宣旨 2 通を作成し、直貞の使者に渡した（中略部分）。

『彦部家譜』（表 B）等には、彦部行貞（光貞）の曽孫に直貞、直貞の弟に重有が見え、貞治 6 年に任官した直貞・重有はこの兄弟に比定できる。『清源寺本高階系図』には直貞はあるが重有はなく、この部分は彦部家編纂の系図が正確である。

先行研究は、『彦部家譜』（表 B）等の直貞兄弟の父貞有に「左京亮」「三番衆」の注記があることから、この系統が室町幕府奉公衆を務めたと考え、前述の『文安年中御番帳』『永享以来御番帳』に見える彦部左京亮（三番）を貞有、康正 2 年（1456）の『康正二年造内裏段銭幷国役引付』の彦部近江守を直貞に比定し、前項の師朝と同様筆者もこれに従っていた[45]。

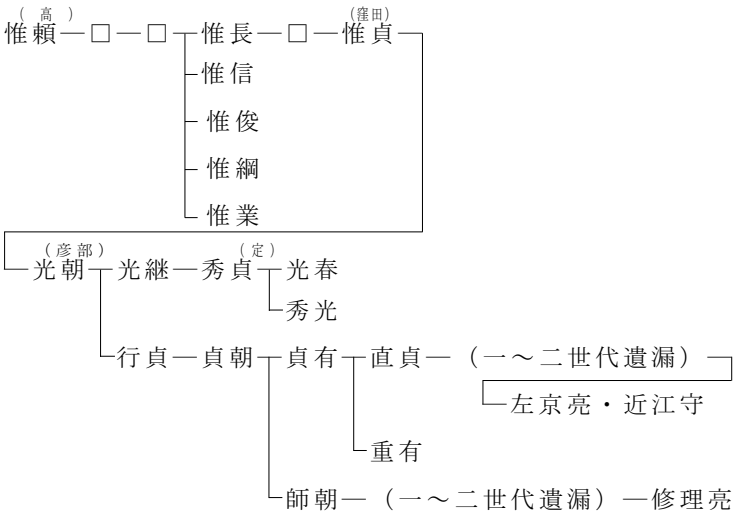
しかし、貞治 6 年段階で直貞が近江守に任官していることが一次史料で確認できる以上、15 世紀中葉の彦部近江守を直貞とすると、彼をどんなに若く見積もっても 90 歳を大きく超えてしまい、きわめて不自然である。室町期の奉公衆がこの系統である可能性は存在するにせよ、系図の貞有・直貞父子と御番帳の左京亮・近江守は別人で、師朝と同様一～二世代の遺漏がある可能性は高いと考えられる。

本章の最後に、本稿で言及した高一族～彦部家の系図を掲げる。繰り返すように彦部家の諸系図は異同が多く、完全な復元は非常に困難であるが、現時点での試案をできるだけ正確に提示したい。

[45] 以上、註 43。

臺灣大學學術期刊資料庫

【彦部氏略系図】



五、彦部家の武家名門への敬意—なぜ、斯波郡なのか—

本章は、二で論じ残した問題、すなわち現在の彦部家が「家宝」である『高階朝臣家譜』（表 A）の記述を否定してまで名字の地を陸奥国菊多郡から同国斯波郡に変更した理由や背景を考察したい。

結論を先に言えば、それは彦部氏が中世以来現代に至るまで抱いてきた清和源氏という武家の名門に対する強い敬意の表れであったと筆者は推定している。いわば、名門を尊重する史観が史実の解釈に影響を及ぼしたと言えるのではないだろうか。

本稿冒頭でも述べたように、彦部氏自身も古代の天武天皇の末裔を称する名家であり、室町期には将軍に直属する名門の武士であった。だがそれでも、清和源氏という「貴種」は別格の存在だったのだろう。

斯波郡説の採用は、まず同郡が斯波氏の名字の地でもあったことが大きな理由であろう。斯波氏は足利一門の中でも最高クラスの家格を誇り、室町幕府管領の要職を務めた名門である[46]。そうした名

[46] 小川信「斯波氏の興起と分国の形成」（註 12 所掲同氏著書、初出 1971、73 年）など。

臺灣大學學術期刊資料庫

門にちなんだ土地への帰属意識が働いたのではないだろうか。

前述したように、近代彦部家の編纂した家史は、異なる複数の所伝が存在する場合は京都の足利将軍家に対する忠誠や緊密な関係を強調するものを優先して選択する傾向がある[47]。彦部氏の名字の地についても、広い意味でその範疇に含まれると言えよう。

だが最大の理由は、文治 5 年（1189）の奥州合戦に際し、鎌倉幕府初代将軍源頼朝が斯波郡陣岡に本陣を設置したことにあると考える。

奥州合戦は頼朝が奥州藤原氏を滅ぼした戦争で、鎌倉幕府の体制が確立した史実として中世史上きわめて重視されている。頼朝は、出陣に際して薩摩国の島津忠久に至るまで日本列島の御家人をすべて動員し、行軍日程等を前九年合戦（1051～62）における先祖源頼義の先例に合わせるなど、御家人との主従関係を再編・強化した。頼朝は斯波郡陣岡に全軍を集結させ、敵軍の大将である藤原泰衡の首もここで晒した[48]。

つまり斯波郡は、武家政権にとっての重要な戦争に密接に関わる「聖地」だったのである。これを祖先と関連づけて顕彰する意図が、彦部家に斯波郡説を採用させたのではないだろうか。さらに言えば、二ですでに述べたように、『彦部系譜』およびそれを発展させた『高階姓彦部家系譜』（いずれも表Ｃ）が高惟長の恩賞地信夫郡を斯波郡と誤記したのも、同様の意識が働いたと思われる。

となると、近現代の彦部家には代々の足利将軍家のみならず、それを含む清和源氏の名門一般に対する強い敬意があったということになる。もっと言えば、それは同氏が中世以来抱いてきた意識であったと考えられる。

史実において足利氏と高一族との間に主従関係が存在したことが確実に遡れるのは嘉禎 3 年（1237）4 月 19 日である[49]。高一族が

[47] 註 7 所掲拙稿 B206 頁。
[48] 以上、川合康『源頼朝』（ミネルヴァ書房、2021 年）300～307 頁など。
[49] この日、鎌倉幕府 4 代将軍九条頼経が足利義氏邸を訪問し、高一族庶流の大平太郎（惟行か）が献馬役を務めた（『吾妻鏡』同日条）。

臺灣大學日本研究資料庫

足利家執事を務めたのが確実なのは、高重氏（師直曾祖父）からで、弘安 4 年（1281）11 月 5 日以降である[50]。

しかし高一族の諸系図は、そこからはるかに遡る平安時代から清和源氏およびその子孫である足利氏との密接な関係を強調する記述が目立つ。

一例を挙げれば、『清源寺本高階系図』は高惟頼について、前九年合戦と後三年合戦（1083～87）に従軍し、特に前九年では源頼義の副将軍を務めたとする。さらに『尊卑分脈』等には、惟頼が実は源義家の四男であったという所伝が記されている。

『清源寺本高階系図』の作成時期について、掲載される人物から室町期ではないかと筆者は推定している。また『尊卑分脈』は、南北朝期に北朝廷臣洞院公定が編纂し、室町期を通じて増補・改訂が行われた諸氏系図である。

つまり、これらの所伝は遅くとも室町期には形成された。これを彦部家も継承し、『高階朝臣家譜』（表 A）は『尊卑分脈』等よりも高惟頼の義家四男説を具体的に記述している。

こうした系図の所伝は、歴史学的に検討すれば史実とは言いがたい場合がある。たとえば奥富敬之は、義家四男説には年代の不一致を挙げて否定的な立場をとっている[51]。

だが、少なくとも高一族の清和源氏や主君足利氏に対する強い敬意自体が古くから存在し、現代の彦部氏まで連綿と継承されていることは確実であろう。実際、筆者は彦部家現当主篤夫氏から高惟頼の義家四男説を立証してほしいと何度か要望された。そうした敬意が、彦部氏の名字の地の陸奥国菊多郡から同国斯波郡への変更に関係しているのではないだろうか。

この点を考えるにあたり、近年の谷口雄太の研究を参照しよう。

---

[50] 同年同月同日付足利家執事高重氏奉書正文、尊経閣文庫所蔵『武家手鑑』上ノ 32 号。この文書については、上島有「折紙の足利尊氏袖判文書について」（同『足利尊氏文書の総合的研究　本文編』国書刊行会、2001 年、初出 1987 年）164～165 頁で言及されている。

[51] 註 2 所掲奥富通史 114～117 頁。

臺德大學學術期刊

谷口は南北朝～室町期における足利将軍家の権威や家格の形成過程を精力的に解明している。それによれば、室町期に足利一門とされたのは足利氏の祖源義国の直系の子孫だけではなく、源為義・義朝父子の子孫も含まれ、そのため源頼朝の弟範頼を祖とする吉見氏も足利一門であった[52]。

この指摘は、代々の彦部氏が主君足利氏だけではなく、清和源氏全体への敬意を抱いていたとする本稿の見解と親和性が高いのではないだろうか。また谷口は、15 世紀に薩摩島津氏が源頼朝の末裔であると主張することで同氏が足利一門でもあることを喧伝していると指摘するが[53]、これも彦部氏と同様の文脈から生まれてきた史観に基づくものと見なせるだろう。

六、おわりに

以上、本稿では鎌倉～南北朝期における彦部氏の動向を実証的に解明し、併せて彦部氏の武家名門としての清和源氏に対する敬意を考察した。前者について、その結論を列挙する。

・彦部氏の名字の地は、通説の陸奥国斯波郡内ではなく、同国菊多郡内に存在した。
・南北朝期には、彦部和泉守・同五郎・同七郎・同次郎という現存の彦部家諸系図には存在しない彦部氏が多数存在し、将軍尊氏の御沓役を努めたり宗家高師泰・師冬の被官となったりして活躍した。しかし、彼らは観応の擾乱で尊氏・師直派に所属したことによって没落した。
・彦部光春の系統は傍流であったが、直義派から尊氏派に転じて生き残ったことにより、結果的に嫡流として室町期に存続した。
・彦部師朝や彦部直貞・重有兄弟は、貞治年間に鎌倉府に奉公していた。彼らを室町幕府の奉公衆とした彦部家の諸系図や先行研究

[52] 谷口「足利一門再考」（同『中世足利氏の血統と権威』吉川弘文館、2019 年、初出 2013 年）190～192 頁。
[53] 谷口「中世後期島津氏の源頼朝末裔主張について」（註 52 所掲同氏著書、初出 2016 年）。

臺灣大學學術期刊資料庫

は、必ずしも史実とは判断しがたい。この系統に関して、彦部家の諸系図に一～二世代の遺漏か混乱がある可能性が高い。

以上、今までの拙稿と併せて鎌倉期から戦国期に至る彦部氏の動向をかなり解明することができたと考える。加えて、中世以降の彦部氏が主君の足利氏だけではなく、清和源氏という武家の名門に対する強い敬意を抱いており、それが名字の地に関する伝承に影響を与えたことを指摘したことも重要な成果であると考える。いわば、同氏の名門を尊重する史観が史実の解釈に影響を及ぼしたのである。

今後も、南北朝期の史実を解明するとともに、それが後世に及ぼした歴史観や、史実と史観双方の相互作用の問題を考察していきたいと考えている。

【付記】本稿は、2017 年台大日本語文創新国際学術研討会（2017 年 12 月 9 日）において、「鎌倉～南北朝期の彦部氏―室町幕府執事高師直一族庶流の動向―」と題して発表した報告の一部を基に作成したものである。発表の際、貴重な御意見を賜った先生方に篤く御礼申し上げます。

【参考文献】（副題省略）

入間田宣夫（2005、初出 1970）「奥州における北条氏所領の内部構造」入間田宣夫『北日本中世社会史論』吉川弘文館

上島有（2001、初出 1987）「折紙の足利尊氏袖判文書について」上島有『足利尊氏文書の総合的研究　本文編』国書刊行会

小川信（1980）『足利一門守護発展史の研究』吉川弘文館

奥富敬之（2013、初版 1995）「彦部家の歴史（古代・中世）」彦部家編『彦部家の歴史　改訂版』群馬出版センター

亀田俊和（2013）『室町幕府管領施行システムの研究』思文閣出版

亀田俊和（2015）『高師直』吉川弘文館

亀田俊和（2016）『高一族と南北朝内乱』戎光祥出版

臺灣人學學術期刊資料庫

亀田俊和（2017）「室町～戦国期の彦部氏」『十六世紀史論叢』8
亀田俊和（2017）『観応の擾乱』中央公論新社
亀田俊和（2022、初出 2018）「近代彦部家の家史編纂事業」亀田俊和『南北朝期室町幕府をめぐる諸問題』国立台湾大学出版センター
川合康（2021）『源頼朝』ミネルヴァ書房
木下聡（2018）「戦国期室町幕府と彦部晴直」彦部家住宅紅葉狩りウィーク基調講演レジュメ
紫波町教育委員会編（1983）『ふるさと物語』紫波町
新行紀一（1979）「十五世紀三河の守護と国人」『年報中世史研究』4
新行紀一（1989）「守護と奉公衆」『新編　岡崎市史　中世』岡崎市
谷口雄太（2019）『中世足利氏の血統と権威』吉川弘文館
豊田武（1983、初出 1967）「元弘討幕の諸勢力について」『豊田武著作集　第七巻』吉川弘文館
沼舘愛三編（1981）『南部諸城の研究』伊吉書院
松島周一（2018）「三河国山中郷と室町幕府」『愛知県史研究』22
峰岸純夫（2009）『足利尊氏と直義』吉川弘文館
八重嶋勲編（2011）「岩手の郷土史料に見る彦部氏」彦部の歴史を深める会編『彦部の歴史』彦部の歴史を深める会
山田邦明（2007）「白河結城氏と小峰氏」村井章介編『中世東国武家文書の成立と伝来に関する史料学的研究』平成 16 年度～平成 18 年度科学研究費補助金基盤研究（B）16320085 研究成果報告書

臺灣大學學術期刊資料庫